



「公僕」は 死語になったのか

柴生田 晴四
(経済倶楽部理事長)

▼「公僕」という言葉があります。年配のかたにとっては当たり前の言葉でしょうが、若い世代には完全に死語となってしまうようです。「公務員は公僕」という表現で公務員批判が行われたときに、「公僕」は「しもべ」として人を見下す差別用語であるとか、国民を「天皇のしもべ」とした大日本帝国憲法下の思想の残滓であるとかいったおかしな議論さえ存在するようです。公務員は単なる賃金

労働者であり、しもべではないというのが若い公務員の偽らざる考えなのかもしれません。▼「公僕」を英語では *civil servant* と言います。日本語の語源がこの英語にあるのかどうか知りませんが、まさしく「公僕」はこの直訳です。欧米の民主主義は国王や貴族、あるいはそれに連なる権力との戦いによって勝ち取られてきたものです。権力に連なる官僚は往々にして権力を笠に着て威張ったり、自らの利益に走ったりしがちです。「公僕」という言葉は、本来、民主権下の官僚への戒めとして使われた言葉なのです。政府や地方自治体における官僚の権限は、国民によって委託されたものであり、公務員は国民に奉仕すべき存在です。「公僕」という言葉を死語に

してしまった日本は、公務員の本来の職分をどこかに置き忘れてきたのかも知れません。

▼最近になって判明した文部科学省による「天下りあっせん」は、まさに「公僕」としての本分を忘れた官僚機構の腐敗を天下にさらした事件です。事務方のトップである歴代の次官がこの存在を認識していたということは、組織ぐるみの犯行であることを証明しています。そして、より重要なことは、これが単なる国家公務員法違反にとどまらず、補助金の交付という権限を振りかざした官僚自身への組織的利益誘導であるということです。

▼自らの活動によって利益を生み出す民間企業とは異なり、行政機関の使うお金の源泉はすべて税金です。行政が運営する事業は独占

的な権限に依拠しており、そこから得られる収入も広い意味での税金であると言っていいでしょう。いずれにしても行政権限はあくまでも国民の福祉のために付与されたものであり、自らの利益追求のために使うことが許されるはずはありません。

▼最近の教育行政は補助金を笠に着て大学のあらゆる活動に口を出しているようです。行き過ぎた「大学の自治」が時代遅れの象牙の塔を生み出したことも事実ですが、「公僕」の本分を忘れた官僚に教育改革をゆだねることは間違いです。そしてこうした教育行政に唯々諸々として従う私学の「学の独立」は一体どこに行ってしまったのか。日本の知の未来は危機に瀕しています。